

松田こずえ（著）

『ノルウェーの幼児教育におけるジェンダー平等と公平性』

2024年 勁草書房 A5判 291頁 定価（本体4,500円＋税）

郡司 明子^{*}

本書を手にする前、ノルウェーという国への知識は浅く、遠い存在だった。北欧5か国の西側、海岸線には多くのフィヨルドが形成され、かつてはヴァイキングの交易が盛んで……。このような断片的なイメージが、読後には、国の政策としてのジェンダー平等と公平性の価値観を、保育の現場から定着させてきた賢明な国であるという認識に至った。

過去においては保守的な男性優位の社会から、女性首相の輩出を含め、さまざまな改革によりジェンダー平等が進む国としても知られるノルウェー（世界男女平等ランキング上位の常連国）だが、その根底に幼児教育における公平性への揺るぎない理念と実践があることを本書は示している。なぜ、公平な社会に向かう必要があるのか。格差社会ではない公平な社会の実現が人の幸福感を高める条件の1つであり、その実現に向けて幼児教育が果たす役割に筆者が着目したことに本研究が始まる。

本書は、ノルウェーの幼児教育におけるジェンダー平等および多様性を尊重する公平な社会の実現に向けた政策上の取り組みや具体的な方法について明らかにすることを目的とした研究書である。2022年にお茶の水女子大学に提出された博士学位論文をもとに、新たな研究成果と修正を加え構成されている。幅広い資料や豊富な現地調査に基づき、ノルウェーの保育政策、カリキュラム、保育者、保護者および子どもについて、公平性の観点から多角的に分析し考察された気鋭の一冊である。筆者は幼稚園教諭としての経験を有する教育／研究者であり、政策上の仕組みや教育制度等への関心に留まらず、実際の保育施設のあり方や保育者の語りを通して、幼児教育において公平な社会を目指すとはどのようなことか、形式ではない実質的なものごとを多岐にわたり捉えようとする探究心が本書を貫いている。ゆえに、ジェンダー平等と公平性の理念（政策）を具現化する保育者と子どもとの接面を通じて読者に響く内容となっている。

一般的に、平等という概念は、対象を対等とみなし、例えば男女を等しく扱うことを念頭に置きがちである。ところが、ノルウェーでの保育施設における男女平等とは「男の子と女の子が平等であるということではなく、男の子と女の子の2通りではなく、100の異なる方法で子どもたちが男の子や女の子に成長する権利を平等に持っていることである」（同国の男女平等センターのウェブサイト）という。二項の対立や比較ではなく、あらゆる可能性を平等に有する権利が誰にでもあることを示す示唆的な文言である。このような平等の価値観や多様性の尊重に基づく公平性とは、人が人と共に生きるうえでの礎であり、かけがえのない一人ひとりの存在意義の拠り所となる概念である。いま、日本で多くの子どもや大人が抱く生きづらさの背景には、この公平性へのまなざしの乏しさがあるのではないか。その意味において、本書は日本における社会的課題にひとすじの光をもたらす指南書でもある。

本書における4つの課題設定（リサーチクエスション）をもとに内容を概観していこう。1つ目「ノルウェーの幼児教育における公平性に向けた幼児教育政策は歴史的に見てどのように変化してきたのか」。公平性には、男女平等や移民にルーツを持つ子どもの包括、および多様性の尊重といった多様な視点がある。それらに関する積極的な取り組みの具体的な内容について、1995年以降3回にわたって改訂された幼児教育カリキュラムの動向を分析し、段階を追って男女平等や多様性の尊重を重視してきた経緯が示される。ノルウェーの保育施設は、子どもたちの養護と教育を行う場としてだけでなく、社会の変革に影響を与える可能性を持つ場としての役割を与えられている。保育施設は男女平等や公平性に向けた意識の形成

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

において重要な場であり、その位置づけは社会情勢や時代により変化しつつも、社会を担う子どもたちが幼児期に伝統的なジェンダー規範を持たず公平な平等意識を持つことが強く志向されてきた。

2つ目「ノルウェーの幼児教育において目指されてきた公平性に向けた取り組みの内容と方法はどのようなものであったか」。子ども、保育者、および保護者の意識を公平性に向けるためにどのような方法が採択されてきたのか。同国の幼児教育カリキュラムでは、平等や公平性、民主主義、多様性と相互尊重、持続可能な開発に向けた取り組みが重視され、あらゆる形態の差別と闘い、思いやりと尊重の意識を育むことが目指されている。また、保育施設においてICTを取り入れた教育を実施することが、デジタル・コンピタンスの違いによる格差や分断を長期的に見て予防することになると考えられている。また、ICT教育における留意点や幼小連携の重要性も強調されている。保育施設での幼児教育が子どもの公平性への意識や社会の平等化を促す役割を担うことが意図されている。

3つ目「ノルウェーの保育者の公平性に関する保育観、子ども観に見られる特徴はどのようなものであるか」。国の政策を具現化するのとは子どもと直接関わる保育者である。ここでは保育者の意識に着目し、保育者のジェンダーバランスや、ノルウェー語を母語としない移民を背景に持つ保育者に関する政策、保育者・幼児教育の研究者へのインタビュー結果の分析をもとに検討している。同国では保育者養成においても、公平性や民主主義の重要性に基づき、多文化共生への対応等の社会状況や社会背景が養成規定の内容に反映されている。また、保育者自身が保育者としてのウェルビーイングや満足度の高さ、社会的に重要な職であると認められていることを意識している。さらに、男性保育者は子どもや大人のアンコンシャス・バイアスを取り払うために、保育施設にいないと存在と考えられており、男女平等社会に向けて意識を変革するプロモーター（促進のための存在）として位置づけられている。男性保育者の役割は男の子にとってのモデルから、父親にとって子どもとの接し方や遊び方のモデルになるように変化してきた。これらの内容は、保育現場におけるインタビューを通してより鮮明に示される。また公的資料の内容から導かれる政府の方針を保育者が理解し保育の中で実践していること、一人ひとりの子どもを尊重し、子ども自身が公平な意識を持てるような言葉がけや働きかけをしていることも明らかにされている。

4つ目「ノルウェーにおける親の権利および子どもの権利の尊重の観点から、幼児教育において公平な社会を目指す取り組みはどのようなものであるか」。ノルウェーでは、保育施設における幼児教育に親が参加する権利、親の子育てをする時間や機会を保障する権利、保育施設における日常生活および保育内容や評価について子どもが意見を表明する権利、および子どもがオンブズマンの監督の下、自らに関わる意思決定に参加する権利が重視されている。公平な社会の実現に近づくために、子どもも大人も公平な社会に参加することが目指され、親、および子どもを尊重する考え方が通底している。

このようにノルウェーの幼児教育では、形式的な平等ではなく実質的な結果を伴う平等を目指して、子どもだけでなく、保育者と親、それぞれの多様性を尊重し、一人ひとりが社会に参加する権利、活躍する機会が保障される権利を重視する考え方があるという。そこでは、幼児教育カリキュラムの内容、保育者による働きかけや教育実践を通して、社会を創る担い手としての子どもに公平性や多様性の尊重への意識を培うことが目指されてきたのである。

本書が示すジェンダー平等や公平性の考え方と日本の現状に差異を感じていたとき、保護者の立場で、ある講習に参加した。それは、日中の地域の見守りは（働いていないことが前提の）母親が行うことを推奨する演題だった。本書におけるジェンダー平等の観点からも違和感があり（黙っていられず）直接、講演者に異議を伝えた。すると、20年前に名付けた演題で今では時代錯誤を自覚、次なる命名を模索中との返答だった。日本でも着実にジェンダー平等と公平性への意識は高まりつつある。その気運を支えることはもちろん、本書には日々の保育や教育、社会に対する見方を刷新し、思わず声をあげずにはいられない＝行動力を推進する力が宿っている。平等と公平性に関する政策を通じ、社会を変革する具体的な手がかかりも記されている。本書は、誰もが公平な社会の担い手となり「自分らしく」生きられる持続可能な社会に向けて一歩を踏み出す道標になることだろう。